

# 下北手・歴史文化探訪



下北手地区振興会

# あいさつ



下北手地区振興会  
会長 田口 善一

先人の知恵に学ぶことが人づくり、まちづくりの始発駅であると思います。  
終着点にたどり着くまで色々な困難があると思います。一つ一つの問題を  
克服して目指す「まちと人」に会えることを夢見て一步一步進んで行きたい  
と思います。

秋田市の地域づくり交付金を活用して作成することができました。

日常生活の心の支えになれば幸いです。

地域の皆様のご協力に心から感謝いたします。

## 目 次

あいさつ・目次	P 1
まえがき	P 2
1. 暮らし（生活用品・道具、食、服装、住居、遊び）	P 3
2. 農 業（農作業、農具、農業機械の移り変わり）	P13
3. 教 育（学校、運動会）	P21
4. その他の懐かしの写真（人物、風景、団地）	P23
5. 座談会・下北手の暮らしの思い出を語る	P29
6. 下北手に伝わる伝説	P34
7. 数字で見る時代の移り変わり	P36
8. 昔使われていた地元言葉	P37

## まえがき

下北手地区は、昭和29年10月1日に秋田市と合併し、それまでの河辺郡下北手村から秋田市下北手となりました。東、北、南の3方を高さ100メートル以下の丘に囲まれ、川は宝川と寒川が流れ、柳館で合流し桜方向へ流れながら太平川に合流しています。

全体としては、田畑と山林が多く、秋田駅東口から約4キロメートルほど東方に位置する東西に約8キロメートル、南北に3.2キロメートルの細長い地域で、北は太平、西は広面、南は上北手、東は河辺に接しています。

町内は、昭和60年に13町内、約850世帯、3,350人でしたが、現在では、13町内の1,217世帯、人口は3,429人（平成25年8月1日現在）です。昔から農業を主として、ほとんど専業農家でしたが、機械化とともに兼業農家も増えました。しかし、最近では耕作者の高齢化が進み農業後継者も減少して今では、田畑が広がるものの休耕田が目立ち始めて昔の面影が少なくなってきました。

昭和50年代には秋田市のベッドタウンとして松崎地区に団地も開発され、さらにノースアジア大学（旧名：秋田経済法科大学）や明桜高校（旧名：秋田経済法科大学附属高校）の茨島からの移設、近年には、高速道路の中央インターも整備されるなど下北手にも新しい空気が吹き込まれ、地域も時代と共に変化してきました。

こうした時代の中で忘れ去られようとしている下北手地区の昔の暮らしや農作業、行事、文化、風景などの記録を残して置くために、当振興会では、住民の方々からご協力をいただき、誰もが見やすくわかりやすいように写真でまとめ、昔の様子がわかるような冊子を作製することにしました。実際に、編集委員が収集を開始して見ると家の建て替えや蔵などの取り壊しで貴重な資料が廃棄され、古い写真や現存する農具などは少なく、情報も不足という状況で、大変難儀をしました。地元には、まだまだたくさんの道具や資料等が眠っていると思いますが、地元にこだわり、このたび、下北手地区で収集できたもので編集しました。

この冊子で古き時代を完全に捉えることはできませんが、昔使用していた農具、道具そして、忘れ去られようとしている暮らしぶりや行事を写真などから時代の懐かしさを味わっていただき、郷土下北手・歴史文化を探訪してもらえれば幸いです。

# 1 暮らし（生活用品、道具、食、服装、住居、遊びなど）

昔は、茅葺き屋根の家が多く、水汲みは普通で、かまどで食事を作り、囲炉裏を囲みながらの団らんがあった。《生活用品》の多くは、稲わらや竹、木のつるなど自然の材料で手作りが多く、今ではあまり使われなくなったが、機能性、使いやすさ、そして、味わいがあった。生活は、隣近所の付き合いと地域の慣習を重んじ、また、家庭では年中行事を大切に、ゆったりとした時間と暮らしがあった。



かこべ：腰にさげ、山菜など採ったものを入れた。



手提げ籠：今で言う買い物籠。野菜、魚など何でも入れた。



柳ごうり：通気性がある今で言う衣装ケース。



おひつ：炊いたごはんを入れておく木製蓋付桶。



いづめ：炊いたごはんをおひつごと入れて保温した。



いづめ：底に乾燥したもぐ(藻草)やワラしべなどを敷き、赤ん坊を入れた。今のベビーベッド。底の中央部が盛り上がり揺りかごのようにできている。



たけかご（竹籠）：中にあんかを入れ、作業着などを乾した。



長持ち：物を長く保管したり、衣類や調度品を入れて置く。嫁ぐ時に、着物などを入れてきた。



小間物箆笥：鍵が付いており、貴重品や着物などを入れて置いた。



あんか：燃やした炭火を入れてこたつで使用。



やぐらこたつ（櫓炬燵）：木枠のこたつ。



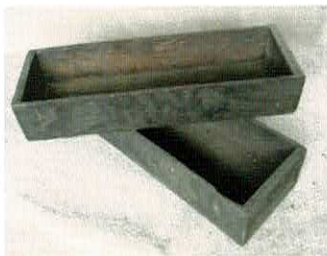
やぐらこたつの中にあんかを入れ、ふとんを掛けて使った。今では、電気こたつが普通。



たる(樽)：酒、醤油などを入れる木製の容器。



ます(枡)：米、豆などの量を計った。棒は、とかけ(斗掛)と言い、ならしに使った。



かた(型)：とうふ作り用の木箱。



五つ玉そろばん：加減乗除、昔は、そろばんが主流。今は電卓。



さおばかり(棹秤)：秤の一種。目盛りのある竿の一端に品物を掛け、把手を支点として分銅を移動して竿が水平になった時の目盛りで重さを計った。



スゲ傘：農作業の雨傘、日傘としても使用。



ひきうす(挽き臼)：穀物や豆類その他を粉碎製粉する道具で、二段にした石臼の上段に取っ手を付けて回して粉をひいた。



てつなべ(鉄鍋)：煮炊きする道具。鉄製。蓋は木製。



つば釜：釜の周囲が薄く突き出ており、釜戸にかけられるようになっている。主に、ごはんを炊く。



胴釜につば釜を乗せたり、せいろ(蒸籠)として、木製の筒、または、かまち(框)の底をすのこ(簀)にして下から湯気を通し餅米などを蒸した。



じざいかぎ（自在鉤）：通称・かぎのはな（鉤の鼻）いろりの中心に吊し、火との間隔を調節しながらやかんや鍋を掛け、煮炊きをした。



ひばち（火鉢）：冬場の暖は、いろりと火鉢でとった。餅なども焼いた。



火消し壺：火の付いた炭は、壺に入れて消し、その炭でまた、火をおこした。



てつびん（鉄瓶）：様々な形をした鉄瓶があるが、これもその1つ。



しょくだい（燭台）：ろうそく立て。



薪ストーブ：薪を燃やして使った。



アルコールランプ：電気が来ない時代や停電の時にランプで灯りを取った。ガラスは、ススが付くので毎日磨いた。

土台造り石：三つ又の柱を中央に立て紐で石の胴を縛ったものを滑車で上げ、落として土を固めた。



魚取り網：堰に仕掛けて魚、どじょう、えびなどを捕った。



わらじ：稲わらを自前で編み靴代わりに履いた。



わらぞうり：稲わらで編んだぞうり。農家では、自分の家で作っていた。



わらぐつ：稲わらで編んだ今で言うサンダル。農家では、農閑期に手作りをした。冬期間使用した軽くて暖かい雪国の履き物。



箱ゾリ：雪の上を押して人や荷物を運ぶのに使った。



板ゾリ：箱ぞりと同じく荷物などを運ぶのと、また、子供の遊びにも使



ドッコ：鼻緒につま革が付いていて、スケートのように、冬に履いて滑った。男はドッコ、女は金具が平行に二本でガッパと言った。



かんじき：深い雪を歩く時に、埋まらないように、長靴などに付けた。木の枝などを曲げて作ったもの。



とびぐち（鳶口）：左上は柄が長く、太い丸太を動かす時、中央は、丸太を引っかけて動かしたり細い材を動かした。（使用時写真右）



どつき（土突き）：建築をする前に地面を突き固める。大きい物は取っ手が何本も付いていてタコとも言った。



まさかり・おの（鉞・斧）：鉞は柄が長く両手で大きな丸太を割る時に使う。斧は金槌を使うように片手で小さな薪などを割る時に使う。



ノコギリ：杉や雑木を伐採したり薪を切る。



ふるい（篩）：粒状のものを使う大きさによって選り分ける道具。



横づち（左）：ワラ叩き石（中央）の上にワラをのせて横づちで打ち（右）、軟らかくしてからワラ細工を作る。





かます（呷）：穀物、塩、石炭、肥料などを入れるのに用いるわらむしろの袋。



さんだわら（棧俵）：わらを編んで作り、米俵の両端をふさいだり、雪踏みにも使った。



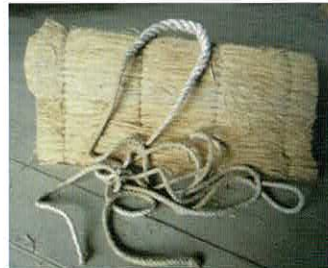
こも（菰）：わらを粗く織ったむしろで、主に冬囲いに使った。



すみだわら（炭俵）：燃料や暖を取るための木炭は茅と荒縄で編んだ炭俵にいった。上下の蓋は、シバを丸く曲げて炭の落下を防いだ。



こだし：みご縄で編んだ物入れカゴ。アケビのつるで編んだ物もある。



にな（蝻・荷縄）：重い荷物を背負いやすく背負う時に使う縄。



せなかあて（背中当て）：下北手では「ひながで」と言う。木やワラの背中あてで荷物を背負いやすくする時に用いる。荷がズリ落ちないように滑り止めが付いている。





せおいもっこ(背負い畚): 木と縄を組んで作ったカゴで、堆肥や土を背負って運んだ。木は曲げやすいミズキを使った。



ふたりもっこ(二人畚): 網状の縄の両脇に棒を通し、重い物でも二人で荷物を楽に運搬できた。



てんぴんぼう(天秤棒)とみずおけ(水桶): 上水道がなかったころ井戸や川からの水くみに使用した。水は、平衡を保ちやすい天秤棒を使って水桶で運んだ。



背負い籠: 竹で編んで使いやすく、畑、山、田仕事などに幅広く使用され、更には、買い物にも用いられた。



おおあし(大足): 水田の整地作業に用いられ、埋まらない利点を活かし、潟のエビ取りにも使われた。





ちょうな（手斧）：丸太を斧で削った後、平らにするために使った大工道具。



長ぞり：接地面に鉄板を貼って滑りやすくし、冬期間の原木運搬やあらゆる荷物運びに使った。



## 服 装



昭和初期、農家の方々の普段着すがた。様々な服装が写っている。

普段に着たと思われる和服。年代不明。



田や畑など、普段、作業する時に野良着を着た。素材はもめんで通気性が良く、動きやすかった。昭和30年頃。





戦後の子どもたちの服装は、男の子は、詰襟で坊主頭。女の子は、着物におかっぱ頭が多い。昭和30年頃。



小学校での集合写真。ほとんどの人が着物を着ているが、中には洋服の女性もいる。当時のメガネはロイドメガネが多かった。



冬は、綿入れのどんぶくを着ていた。昭和40年頃。

## 食べる



笹巻き：円錐状にした笹の葉にうるかした餅米を入れ、お湯で煮る。殺菌力もあり、おやつ代わりにきなこなどを付けて食べた。



干し餅：冬場の保存食。砂糖の入った切餅(色づけもした)をつき、そして、水にうるかし、寒風にさらし、凍らせたものを干した。春先のおやつだった。



太巻き寿司：甘酸っぱい味がするお寿司。お雛様や誕生日などお祝い事でよく作った。今では作る家庭も少ない。



朴葉めし：炊きたてのご飯にきな粉をかけ、朴葉にくるんだおやつ。



赤ずし：餅米を赤じそと酸味あるキュウリで漬けた保存食。砂糖を掛けてお盆に食べた。



流し場風景：湯沸かしかまど、流し台が見える。奥には、布をかぶせた洗濯機もある。



かまど：ご飯を炊くつば釜と湯を沸かす鍋が見える。薪で焚いていた。当時は文化かまどとしてとても便利だった。



祝言の三三九度の道具：朱塗りの杯と銚子。



お膳：昔、冠婚葬祭などは、自宅で行うことが多く、朱塗りのお膳を持っていた。一の膳、二の膳などがあり、客をもてなす料理をのせるのに使った。



酒器：日本酒を飲む時に使った。真ん中の器は杯を洗うのに使った。特に、濁酒を入れて飲んだ。



朱塗りのお碗：主に吸い物入れで使用した。



はいぜんだい（配膳台）：冠婚葬祭など大勢の方を迎えた時に、お膳に料理を取り分ける時に使った。



ぜんばこ（膳箱）：膳を使用しないときは膳箱に入れてしまっていた。

## 住居・暮らし



茅葺きの家：今では殆ど見られなくなった。



茅葺き家の解体風景：昭和50年代。



昭和50年代の茅葺き屋根の黒川集落。



昭和30年代の住い：壁は漆喰、道路はまだ舗装されていない。



ブラウン管白黒テレビ：相撲、プロレスを良く見た。昭和30年代。



神棚：仏壇の上にある家が多く、しめ飾りで飾ってある。



漆喰造りの欄間：土壁で作ったこて(鏝)絵欄間である。建物は、築170年。



いろいろと火鉢：昔は、どこの家にもあった。いろいろは、家族団らの場であり、ここで、煮炊きもした。火鉢は、暖房に使用した。わたしで焼き物もした。



天神様（八橋人形）：昔は、家に男の子が生まれると飾った。昭和10年頃。



雛飾り：女の子が生まれた家庭では、旧暦3月3日に雛飾りをした。押し絵雛は大正5年頃のもの。

## 遊び



スキー遊び：坂があればどこでもスキー場になった。木のスキーに長靴を革のバンドで結んで滑った。後に、そり滑りも見える。



かまくら作り：昭和60年頃、子ども会の活動として、冬になると親も子もいっしょになってかまくらを作った。中は、暖かく餅を焼いて食べたり、ゲームをして遊んだ。



そり遊び：ミカン箱で作ったそりで楽しく遊ぶ子ども。



## 2 農業（農作業、農具、農業機械など）

昔の農業は、まだ、機械化が進んでおらず、農作業の工程に合わせた農具を使い、農繁期には朝から晩まで田に入り、子どもたちも学校を休み仕事を手伝っていた。牛や馬も大きな力となり、家族同様大切にされていた。農閑期には、稲わらで縄やわらじを編んで自給自足もしていた。

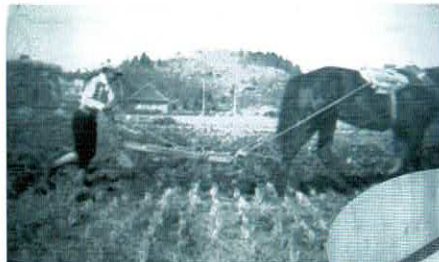
### 昔の農業四季【春】



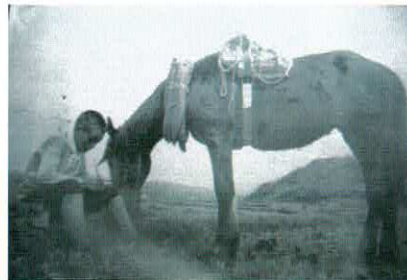
苗作り：稲作は、春の苗作りから始まる。苗床を作り種籾をまく。ビニールでトンネルを作り、促成栽培で苗作りをした。



苗の生育状況を調べる。



田んぼの耕し：牛馬を使って田畑を耕す前は、人力で行っていた。近年は、すべてトラクターで春作業をしている。



馬耕：人馬一体で田耕しを行った。

代掻き：耕起した田に水を入れ、マンガで土を砕き、ならして田植えの準備。



クランク式耕耘機：田起こし作業。



テラー：水田車輪を付けての代掻き。



あぜぬり（畦塗り）：水田の水漏れを防ぐため畦を泥で塗り固めた。くろぬりとも言った。



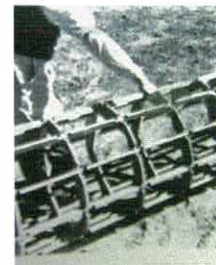
苗取り作業風景：水苗代にばらまきした種籾が成長すると苗取りをして田植えをした。今では、ほとんどビニールハウスで苗を育てている。



苗運び：苗代から田に苗を桶に入れて背負って運んだ。



田の型付け：代掻きした後に苗を植えるため木枠で型付けをした。



田植え風景：5月の中旬から始まった。作業は、一家総出の仕事であった。田植えは、主に女性（しよとめ）の仕事で一株ずつ手作業で植えた。子どもは、苗を田圃に投げる（小苗打ち）係だった。



苗代研修：苗の成長チェック。



小屋（たばこ時間）：午前10時と午後3時に田植えの途中に小休止の時間があった。短い時間であったが、きな粉おにぎりやパン菓子などを朴の木の葉を皿代わりにして食べながら談笑した。



小屋：田植えの合間に家族、親戚など手伝ってくれている全員で小休止している。

## 昔の農業四季【秋】



稲刈り：昔は、機械もなく田植えと同様に一家総出の仕事だった。



ひととき：稲刈りの途中で、子供と小休止。



はさ（稲架）とくい（杭）掛け：昭和50年代までは、杭掛けで（40～50束の稲）、稲架掛けはやぐらに稲を掛け干した。





稲上げ：収穫し、干した稲を脱穀するために、リヤカーに山積みして家に運んでいく。



脱穀：持ち帰った稲は、動力脱穀機で籾を取った。籾、ワラ、ごみの分別が可能となった。



運搬風景：荷車に米俵乗せ、馬に引かせて農協へ供出していく。昔は、各家々で米60kg（一俵）入る米俵を作り入れて



だいこんの収穫：稲作の外に、畑に野菜を植え収入にもした。



だいこん洗い：大根は、洗ったあと、干して漬け物にした。

## 昔の農業四季【冬】



堆肥：春作業の前に、馬ソリや長ゾリで田んぼに堆肥を運んだ。



馬ソリ：農作業にとって牛馬の力は無くてはならないものであった。牛馬は、とても大切に育てられた。



堆肥運び：馬ソリや長ゾリで堆肥を運んでいたが、機械化され、キャタピラ付テレーで運ぶようになった。昭和50～60年頃。

## 農業機械の移り変わり

昭和20年代の農作業は、一家総出のすべて手作業の時代であった。昭和30年代からトラクター、田植機、コンバインと徐々に機械化が進み農家に入り込んでいった。改良が加えられて農作業が楽になり、暮らしにも時間とゆとりができてきた。



耕耘機：ロータリー式回転で歩行して田畑を耕した。



トラクター：歩行の耕耘機から乗用になり、トラクターとなった。



クローラ型トラクター：軟らかい水田にも埋まりにくく農作業が大幅に効率化された。



歩行田植機：昭和40年代後半二条植えとして歩いて機械植えをした。



乗用田植機：乗用になり肥料や除草剤が同時に出来るようになり、また改良され5条・6条植えが普通となった。



バインダー：手刈りから機械により稲刈りをして束ねる作業ができた。



ハーベスタ脱穀機：自走式脱穀機で田んぼで乾燥した稲を脱穀できた。



運搬車：車輪の代わりにキャタピラが付いていて田んぼの中の走行が可能になり、土や糞、堆肥など色々な物を運ぶのに使用。



自脱式コンバイン：機械が刈り取りと脱穀を同時に稲を袋詰めにした。自然乾燥から自宅乾燥に。



テーラーで暗渠：田んぼの排水を良くするために溝切りを手作業から機械にした。



グレン（タンク）付自脱式コンバイン：グレンに稲を溜めてオーガで専用運搬機に送れるようになった。



クローラ型トラクターで明渠：平成20年代になり、トラクターに取り付けて明渠掘り。

## 農具【春】



マンガ（馬鋤）：左は荒掻き馬ぐわ。中央はならし馬ぐわ。両方とも牛馬に引かせて田をならすために使用した。



ならし板：代掻き後、泥面の高い所を平らにするための板。



型：田植えを手植えしていた当時、植える場所の跡を転がして付けた。



水車：水路より田んぼが高い時に、用水路から田んぼに水を引くための道具。足踏み式と手動式があって、写真は手動式。



苗運びおけ：苗代から取った苗を入れて田んぼまで運んだ。(背中当てと荷縄を使用した。)



## 農具【夏～冬】



水飲み器：馬などが水を飲む器。石でできている。



なたがま（鉞鎌）：杉林など下刈り用の鎌。



除草機：除草作業の内容によって使い分けた。



とが（唐鋤）：堆肥切り用。



とが（唐鋤）：岩など硬い所を掘る道具。



くわ（鋤）：畑などを耕す鉄製の鋤。右は、先だけが鉄製になっている。



まっか：左は堆肥運搬に使用。右は田畑を耕す。



ちり飛ばし・とし：ちりを飛ばすために風を起こす機械と籾とちりをふるいに掛けて選別する道具。



とうみ（唐箕）：上の口から  
 籾を入れ、風を送り、ちり  
 を飛ばして選別した。



じよげ：  
 打ってワ  
 ラを軟ら  
 かくする  
 ために使  
 った。



かけや：杭打ちな  
 どに使用した。



スペート：みぞ掘り用の  
 スコップ。



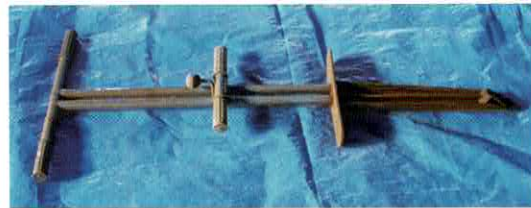
俵編み機：ワラで米60キロ  
 グラム用の米俵を編む機械。



てりり：籾をみご  
 から取る時や大豆、小豆を殻から  
 取る時にたたく  
 棒。



てかぎ（手鉤）：蔦口の一種。  
 農作業用は、長さ約25cm  
 程の棒で筋金入りの先口鉤  
 を付けたもの。主に、米俵を  
 結う時に用いられた。



穴開け機：直角に立て、ハサの杭  
 を挿す穴を開けるもの。



足踏み脱穀機：乾燥した稲穂を脱  
 穀した。





横ゾリ:冬に竹籠を付けて堆肥運びに使った。



めつきゃ (竹箕): 田んぼや畑に堆肥をまく時に使用。



み (箕): 穀物などを振るい、ゴミと分けた。



馬の口輪: 馬の顔に付ける物。前の鎖は口に噛ませた。



舵棒と馬のハモ: 荷車や馬そりに舵棒を付けて、ハモを馬の首に付けて引かせた。



牛のハモ: 牛の荷車や馬そり用ハモ。



馬の鞍: 荷車や馬そりを引く時に背中に付けて荷物を乗せた。

### 3 教育 (学校、運動会など)

旧下北手小・中学校は、木造の校舎で渡り廊下でつながっていた。現在のワークセンターの場所にあったが、小学校は昭和56年、中学校は、平成元年に今の場所に移った。現在の下北手地域センターのあるところは、学校のグラウンドがあった。下北手は、教育熱心な地域で、積極的に教育実習生を受け入れたり、社会教育や婦人会活動も盛んであった。

#### 旧下北手小・中学校



旧下北手小学校正面玄関。



旧下北手中学校正面玄関。



旧下北手小学校の校舎建築中の写真。



木造2階建ての旧下北手小学校。



旧下北手小学校の校舎に校外スピーカーが付いていた。



校舎前でのラジオ体操風景。



小学校の体育館：ピカピカの床で、野球をやっている。



旧下北手小学校の校舎全景。



小学校の調理室。



全市的に古い木造校舎からコンクリートの校舎に変わった。

## 女子高等師範の研修

(下北手小学校は女子高等師範の付属小学校にもなっていた。)



夜間の和室での学習風景。



職員室風景。



井戸で飲み水を汲んでいる。



柳館神明社の清掃活動。



野菜作りのための水まき。

## 大運動会・地区民体育祭



運動会は、小・中学校合同で開催されていた。地区民体育祭も盛大に開催されていた。



いっち、にい、  
さん、しい：  
準備体操をする小学生。



運動会には、家族が  
重箱に料理  
を作って応援にきた。

## 4 その他の懐がしの写真（人物、風景、団地など）



旧下北手小・中学校があった裏山の上から見た  
谷崎方面。右奥は、松崎方面。昭和35年頃。



旧下北手小・中学校のグラウンド。現在は、  
下北手地域センターがある。



秋田中央インターからのアクセス道路。（着工直前と完成後）





高速交通関連道路整備事業開始。右奥にノーシア  
大学が見える。



秋田駅東中央道（アクセ  
ス）平成7年開通。



お母さんを乗せてリヤカーを引  
く子ども。昭和30年頃。



歩きながらお菓子を食べている  
女の子たち。酒屋の看板、床屋の  
サインが見える。（柳館）



左写真と同じ通り。



嫁入り：雨の中、あぜ道を歩きな  
がら嫁いでいく花嫁。



笑顔が一番：はだし、下駄、  
短靴とみんなばらばらが  
また可愛い。



おじいちゃんに抱っこ。



青年団の集合写真。



洗濯：たらいでの手洗い  
風景。



下北手村・小林多治村長（前列：左  
から三人目） 助役 村会議員一  
同。 昭和26年5月29日撮影



なんとも地味な昔の農協  
の貯金通帳。



三輪自転車：昭和60年代年配女性が、生活の足として使用。



平成11年の下北手地区敬老会：地域センターが参加者で溢れている。



堤の日干し：結構フナやコイが捕れた。



宝川温泉：明治19年道路を造る際に源泉を発見。湿疹に効くと言われ、県に出願、昭和26年8月に浴場を開設し、多くの人が利用していた。冷泉なために薪で湧かしていた。今は、枡だけなごりで残っている。



ボーイスカウト14団下北手少年隊：昭和34年発足、前秋田空港での秋田県ジャンボリー大会。



町内でのレクリエーション。



廃品回収：リヤカーで廃品回収をする子ども会。(寒川)



柳館の神明社：以前は、茅葺き屋根、境内の杉の木は伐採されている。



村越商店前から旧農協支所方向を見る。右手に稲架が見える。右下は現在。(柳館)





柳館三叉路からの道路。右が現在。

柳館三叉路  
から赤平橋  
方向を見る。  
右が現在。



松崎地区大堤：地域の用水不足を解消し生産性の高い水田農業を確立するため平成元年度着工、平成5年度完成。県営ため池等整備事業の施行前と施工後。

## 昭和50年当時の県営住宅と千秋の丘団地



千秋の丘松崎団地：昭和45年から造成が始まり、49年11月より入居が始まった。50年には、居住者23戸で千秋の丘松崎団地町内会が結成された。現在では、250世帯を越えた。



県営松崎住宅：昭和50年に団地の北部の土地を秋田県住宅供給公社に譲渡した。51年に着工開始し、54年までに10棟を完成させた。現在250世帯。



千秋の丘：昭和51年頃の風景。住宅はまばら。



櫻谷地方方向から見る千秋の丘松崎団地と県営松崎住宅。



県営住宅：分譲地販売の看板が見え、まだ、2棟しか建設されていない。個人住宅は、全く見えていない。(昭和51年)



千秋の丘松崎団地と県営松崎住宅の航空写真。



駅伝大会：昭和55年頃の小学生による町内周回の駅伝大会。



子どもみこし：園児、小学生がみこしで町内を周回した。今は、地区の夏祭りで披露している。



子ども会での地引き綱：  
子ども会活動は、この他に、秋のなべっこ、餅つき、雪まつりなどを行っていた。



盆踊り：夏祭り会場での盆踊り。



千秋の丘会館：昭和57年10月、住民待望の千秋の丘会館が建設され、地域の殿堂として町内居住者の親睦、連携、協調を保ち、自治活動、福祉活動、文化活動などが盛んになった。

## 緑ヶ丘町内会



運動会：町内の公園で運動会を行っていた。園児の徒競走。

## 白山町内会



児童公園で草刈り清掃する町内の皆さん

## 5 座談会 【下北手の暮らしの思い出を語る】

日時：平成 25 年 6 月 26 日（水）

会場：下北手地域センター



出席者：（敬称略）

元下北手地区納税貯蓄組合協議会長 井川 銀三（寒川）

秋田市農業委員 川村 一郎（宝川）

下北手豊生会長 進藤 新太郎（柳館）

元下北手地区婦人会長 進藤 敏子（谷崎）

司会者：元下北手地区振興会副会長 川村 俊春（宝川）

司 会：「下北手・歴史文化探訪」の冊子を作成するに当たり、農具や生活道具、写真などを可能な限り集めましたが、冊子の充実を図るために諸先輩の昔話をお伺いする座談会を企画いたしました。様々な体験談をお聞きできればありがたいです。

**始めに生活基盤についてお聞きしたいと思います。**

**電話は、昭和 30 年中ごろに有線放送でしたか？**

進藤（敏）：交換手は、確か、女性が二人だったと思う。家に電話が掛かって来る時は、家の番号が決まっていて「何番何番」と交換から呼ばれて出た。その頃は、電話が無かったので、隣から連絡してもらったものです。

井 川：電話に関しては、あまり記憶がないな。50 年も前でないか。

進藤（新）：そう言えば、各部落に一台位公衆電話があったな。

司 会：**バスはいつ頃来ましたか？**

進藤（敏）：一度バスが入って来たけど、谷崎の川（宝川）でバスが落ちて、それからしばらく来なくなった。

川 村：小林多治さん（P24 参照）が村長の時にバスを下北手に廻した。



井川銀三さん

進藤（新）：最初、農協までで終わっていた。それではだめだと宝川まで延ばした。

進藤（敏）：下北手が秋田市に合併になった昭和 29 年頃、私が高校生の時にバスは走っていました。でも、私たち高校生は、バスを利用しないで学校まで歩いたものです。

進藤（新）：バスが来たのは昭和 26～27 年だと思うなあ。

司 会：**交通手段として冬は、馬ソリで病院につれて行ってもらった記憶がありますか？**

井 川：当時、冬は雪もかなり降ったものだから交通手段としては、馬ソリとか長ソリで市内に出掛けて行った。今みたいに除雪も無かったから道付けの除雪効果もあった。

進藤（新）：どこ行くにも馬で出かけていたものだ。

川 村：私は結構どこ行くにも歩いてた。

進藤（敏）：子どもや結婚式などは、馬ソリや箱ソリ（P6）も使ったけど元気な人は皆歩きました。

司 会：**道路も砂利道でしたか？**

川 村：玉じャりの上を下駄を履いて歩くのが大変だった。

司 会：**山道がありましたね？**

井 川：上北手に叔母がいて、ご祝儀に行く時など、年に3～4回通沢から黒川を通過してよく使った。

進藤(新)：乗り物がないから山道はよく利用したもんだな。

川 村：山道は、よく歩いたから草が今みたいに生えていなかった。近道によく使った。

井 川：寒川から宝川へ抜ける道は、3ヶ所あった。あと、井関へも越えて歩いたもんだ。

司 会：**水道についてはどうですか？**

進藤(新)：杉の丸太を半分にして溝を掘り、沢水を入れ水として家まで繋いで飲み水にした。

井 川：水道関係ではかなり苦労した。寒川では、太平農協の近くの土手に井戸を掘ってポンプ上げして引いてきて使った。その後、簡易水道ができた。

進藤(敏)：谷崎は、学校給食が始まった時に水道ができましたが、それ以前は、秋彼岸から春彼岸まで桶に汲宝川の水を飲んでた。夏の間は、井戸水を飲んでました。

進藤(新)：井戸水は飲み水、川の水は洗濯や馬を洗ったりと別に使っていた。

井 川：寒川には町内に井戸があり、涸れることはなく、汲ませて貰っていた。

司 会：**個々に個人や井戸で入れ水でやっていたのですね。**

進藤(新)：細谷は涸れることはなかったが、ビニールパイプができて、落差でしばらくやっていた。簡易水道は昭和50年に入った。

川 村：宝川では、日照りのために水がないので、沢水を使用したら沢水で田圃を作った人に怒られた。その後、簡易水道を造ったが、砂が流れるなどで、管理も大変だったし、経費もかかった。

井 川：朝晩、桶担いで水汲みに何回も行った。それが日課だった。

全 員：水では本当に苦労した。

司 会：**川に牛や馬をつれて行きましたね？**

井 川：馬水と言って馬を川に入れて洗った。

進藤(新)：馬の足を冷やしてもやったな。

進藤(敏)：本当に「川の流れ水三尺」と言って少し下流の水を飲んで生活していました。

司 会：**電灯にいきます。ランプ生活でなかったのですか？**

進藤(新)：停電があった時に、ランプ(P5)を使った。細谷は、昔、石油を掘っていて動力が必要で、飯場もあつたりトロッコもあつたりで昭和3年から電気が付いていた。

井 川：寒川も電灯は付いていた。

司 会：**衣服についてはいかがですか？**

進藤(敏)：女の方はみんな着物は自分で縫っていた。結婚前の方は、今で言う地域センターの和室で冬期間に習った。親は、自分の着物をほどいて子どもに着物を縫ってくれたもんです。

川 村：男は農作業の時、ながりこ(農作業用和服)を着ていたもんだ。

司 会：**私も父の軍服で小学生用の服を作ってもらった。蚕は飼ってなかったか？**

進藤(新)：飼っていた家はあった。桑の木づくりに補助が出ていたようだ。



川村一郎さん

井 川：桑の木を山に付けていた。

司 会：**食べ物についてはどうですか？**

進藤(敏)：豆腐、納豆、味噌は全部自家製。味噌造りは、男の人がワラ靴を履いて原料の大豆を踏んで潰していました。

川 村：納豆もよく作っていた。

進藤(新)：ところてんも作ってたな。ウサギは食用としてよく飼っていた。

川 村：食用としてニワトリは外に放し飼いで飼っていた。昔は、漬け物に力を入れていてたくあんをおかずにしてよく食べていた。梅の木は、どこの家にも植えて梅干しを作っていた。枝豆は、どこに遊びに行くときでも持って行ったもんだ。

井 川：今でもそうだ。

進藤(敏)：それに、笹巻き (P10)、赤ずし (P10) もよく作りました。野菜は自家製で、魚は行商から買っていました。その後、柳館に魚屋が出来ました。

進藤(新)：魚の行商は自転車に箱付けて売りに来ていた。

司 会：**住まいはどうですか？自分の家を建てる時、こびき職人が切ったり、移動製材が発動機を持ってきてやっていた頃もありましたが。**

井 川：萱屋根 (P11) だったので、農作業が終わった後に萱場で萱を刈り取り。その萱は、冬囲いに使用して春に冬囲いに使った萱を屋根葺きに使った。3～4年もかかって少しずつ片平ごとにやった。萱集めが大変でやめた家もある。



川村俊春さん

司 会：**今、茅葺き職人はほとんどいないのではないですか？**

全 員：いないのかも・・・。

司 会：**ムシロ (P7)、ゴザなどワラ細工は作らなかったのですか？**

川 村：ワラ靴、草履 (P5)、ワラジ (P5) など親の時代によく作ったもんだ。小学校の冬休みに学校宿題で箕縄を作らせられた。

進藤(敏)：学年によって何把とか決められていた。米俵は、米を出す量だけ編んだもんです。私のおじいさんは冬にワラでサンペを編んでくれてそれを履いて学校に行きました。帰ってくると濡れたサンペを囲炉裏の上に乾して次の日にまた履いて行った。

進藤(新)：米俵の話で、早場米を農協に出すと奨励金があったので夜なべして作ったもんだ。

進藤(敏)：囲炉裏 (P12) に稲ワラで作ったべんけいがあって、あぶった魚を保存食として串にさして置いたもんです。

司 会：**道具についてはどうですか？**

進藤(敏)：春には、今は、機械だけど、昔は馬耕 (P13) の前にめっきゃ (P21) を女の人が堆肥を散らかす時に使いました。

井 川：めっきゃ専門に作っている家があつて市役所の清掃課に納めていた人もいた。

進藤(敏)：材料は苗代ダケで作っていた。

司 会：**薪、炭は？**

進藤(敏)：囲炉裏で薪を燃やしていたが、その後、ストーブ (P13) で薪を焚くようになった。

川 村：当時、薪や炭を使うということで、副業で山を持っていた人は、冬になれば山で炭



を焼き、農協に出して農家の現金収入にした。

進藤(新): 炭検査員がいて検査があったなあ。

川 村: 炭焼きは、三尺に切って釜に立てて入れ、火を付けると一日で炭になった。炭も等級があった。一級品はナラ炭で、白炭は1日、黒炭は1週間で作った。

司 会: **次に食べ物ですが何かありますか？**

進藤(敏): 旧12月8日は「織神」でコーセンを作って神様にあげました。

進藤(新): 山の神は12月12日で餅を供えた。供えたものは、おろしても女性は食べられないものだった。

川 村: 昔は行事のたびに餅をついて、餅つきの次の日は、必ず休みだった。

進藤(敏): 旧5月5日の節句はショウブとヨモギを屋根にさしたもんです。

進藤(新): 我家では今でもやってる。ショウブ湯もやっている。田の神様は、箕に一升餅をのばしてその上に稲刈り鎌とロウソク、お酒をあげた。「刈り上げ節句」は、箕に餅を乗せて供えた。馬頭観音は、今でも祀ってる。

司 会: **鯨もかなり干したもんでないですか？**

進藤(敏): 値段も手頃だったんで、動物性のタンパクで保存食として食べました。

進藤(新): ハタハタもよく漬けた。米も今の倍も食べたもんだ。

司 会: **農作業についてはいかがですか？**

進藤(新): 水苗代 (P14) にもやした種をまいていた。

進藤(敏): 今では公害になると言われていますが、発芽をよくするために薫炭も作って田に蒔いたもんですね。

進藤(新): 水苗代、折衷、三早、ハウス栽培で仕事が楽になった。

川 村: 田植えでは小休止 (P15) のたばこ時間があり、子どもたちは、小苗打ち (P14) を手伝っていた。

進藤(敏): 田植えしている人をしょとめ (P14) (早乙女) と言ったもんです。

進藤(新): しょとめが大勢そろえば綺麗だったな。

井 川: しょとめも赤いものを着たりしてかっこ付けていた。

進藤(新): かすりも年齢によって着るものが違い華やかであった。

進藤(敏): 田んぼで稲わらを焚いて、暖を取ったり虫除けもした。

川 村: 青草刈りは手鎌でやって牛馬に与えた。田の草取りは3回もやり、7月の土崎港祭りまでかかった。

井 川: 大きな農家では、若勢、めらしが住み込みで働いていた。将来は、田んぼを貰って独立した人もいた。

進藤(新): まや (馬屋) の二階で寝起きした。修業を兼ねて住み込みで働いた。

川 村: 一般農作業の一日の手間は米3升で働いた。

稲刈り後、宝川では水力を利用して粳すりを行った。

進藤(敏): 冬は堆肥運び (P16) だった。

冬に用材を切るのので、焚きつけの柴が欲しくて春彼岸の頃、取りに行ったもんだ。



進藤新太郎さん



しょとめは、あやめのこと

司 会：**年中行事についていかがですか？**

川 村：昔の農作業は、すべて旧暦であった。祭りなど今は新暦でやっている。春は、学校の運動会（P16）が忘れられない楽しみだった。

進藤（敏）：十五夜の供え物は、おなごは食べられなくて男性が食べてた。

進藤（新）：蔵開きは1月11日で今もやっている。お膳はその年の厄年の人が食べた。

進藤（敏）：夏は、虫祭り（鹿島祭り）で笹巻きを作った。娘が実家に帰ってきた時に、土産に笹巻きを持たせて帰したもんです。年祝いでは秋田万歳を呼んで祝いもしました。

川 村：梵天も盛んにやっていたな。（皆、んだ、んだ）

進藤（新）：酒調べがあつて密告されて見つかることもあったな。

司 会：**つぎに、教育ではいかがですか？**

川 村：学校に行く前に馬を放牧に行つて、そして夕方迎えに行つたもんだ。

進藤（敏）：当時は、小・中（P21）で体育館は両方で使っていました。

井 川：私は、新制中学一期生で、学校は柳館の山の上にできた。小学校に裁縫室があつて、紅白の幕で仕切られていて、よく長まっていたもんだ。その後、日曜だけの下北手幼稚園が同居していた。

司 会：**娯楽、楽しみなど何かありますか？**

川 村：兵隊ごっこ、家に集まってから川泳ぎもやった。

進藤（新）：輪回しをやったね。風呂の針金を外して輪っこ作つて怒られた。野球大会もあった。

川 村：どこの村でも青年会は、盆踊りをやっていた。

井 川：巡回貸し付け映写機で映画もやった。

進藤（敏）：9月には芸能大会を各村対抗で競つてやっていました。

進藤（新）：学校の体育祭とは別に地区民体育祭をやっていた。冬は、氷の張った田んぼで滑つて遊んだし、映画もよく見たし、金座街の鎌田の酒まんじゅうも食べた。

川 村：学校に土俵もあつて本格的に相撲大会をやった。町内の神社にも土俵があつた。

司 会：**他に何かお話ししたいことがありますか？**

進藤（敏）：昔、今のワークセンターの登り口の所に婦人会館があつてそこを拠点に婦人会で地区民に対して貸し衣装とか仕出し料理も盛んにやっていました。

川 村：昔は自給自足でやったし、下北手はほとんど農家だった。現在は、就農者が少なくなつてきて、これが時代の流れなのか。正しい流れなのか。当時を思えばとても感慨深い。

進藤（敏）：下北手の中の休耕田が無くなればいいと思います。

進藤（新）：松崎などの中央の田も荒れていてもったいない。先人の人に申し訳ないな。

司 会：長い時間、色々と貴重なお話ありがとうございました。



進藤敏子さん

記録者 佐々木紀男 加藤忠弘 田中春生  
石塚 威 飯塚四朗

## 6 下北手に伝わる伝説

### ◆松崎

昔、谷内佐渡に籐蔵という人が住んでいました。広面部落の田圃に水を引こうと大沢田に貯水池を築こうとしました。そこで、殿様からお金を借りて事業にかかりました。しかし、うまくゆかず失敗してしまい死刑になってしまいました。町内には、その名を残し「籐蔵堤」という地名があります。

### ◆櫻谷地

守沢堤土手下に「鶴の湯」という温泉があって、大正9年頃までは湯治場として栄えていました。昔、足を痛めた一羽の鶴が、堤の土手下の湧き湯に飛んできました。2、3日そのお湯に足をひたしていると、傷がすっかり治って、やがて、元気に飛び去りました。それ以来、地元の人々は、そこを「鶴の湯」と呼ぶようになったということです。

### ◆黒川

今から数百年前に殿様が住んでいました。そのお姫様が、重い病気に罹り亡くなりました。殿様は、たいそう悲しまれ、お墓の中に首飾り、お金などたくさんの宝物を入れてやりました。そのお墓は、村の東の方400メートルの所で、村の共同墓地のあった所です。今から150年位前村の若者が掘ってみました、いくら掘っても宝物は出ませんでした。



黒川の共同墓地。

### ◆黒川

黒川のカッチ(奥)に昭和30年代まで馬や牛を放していた放牧場がありました。この放牧場の山頂付近には小さな沼があり、年中水が溜れることはありませんでした。この沼は、大昔、オオフト(巨人)が河辺方向から歩いて来た時の足跡と言われており、そこに雨水が溜まり沼になったと言われています。もう片方の足は横森(現在の横森3丁目付近)に付けた足跡で、同じような沼がありました。この沼は、当時牛馬の水飲み場として使われていました。



オオフトの足跡と言われている沼。

### ◆宝川

大昔、毎日、毎日雨が降らなかったため、各地の水はすっかり無くなり、飲み水が無くて人が死んでしまいそうになったことがありました。ところが、この村を流れる小川は、清水がこんこんと湧き出て少しもかれることはありませんでした。そのため、各地の人々はここに集まり命をつなぐことができました。そこで、この小川のことを「宝の川」と呼び、やがて「宝川」という村の名前になりました。

### ◆寒川

昔、佐竹の殿様が秋田にやってきたころ、前から住んでいた豪族たちは、すきあらば佐竹氏を倒そうと思っていました。その頃、太平の目長崎に舞鶴館を築いていた永井太平守右近将監広治もその1人でした。彼は、館の前の山にたくさんの軍勢を集め、先頭に立って戦いましたが、佐竹公に勝つことはできず、峠を越えて逃げてしまいました。それで、この峠のことを「去坂峠」というようになりました。さて、その戦いに敗れたため、数百人が捕虜になり、中には目長崎や寒川の百姓がたくさん入っていました。佐竹公は、捕虜を八橋の刑場に連れていこうとしましたが、あまりの多くの人数だったので、新しく寒川の鍬台山の奥沢に刑場を作りました。そして、ここで、捕虜を皆殺しにしてしまいました。後に、殺された人々の幽霊每晚每晚出てきて村人を脅かすので、夜も眠ることができなくなりました。そこで、村人たちは、佐竹の殿様に死んだ人たちを慰めるお堂を建てることをお願いをしました。村人は、ていねいに祀りをしました。今では、ここを首切沢、堂が沢、覆面沢などと呼んでいます。しばらくして、この地蔵様を去坂峠に移したといわれています。



去坂峠から太平方面を見る。

### ◆柳館

昔、梨平に気立ての優しいきれいな娘がいました。良く働く孝行娘で通沢にもらわれていきました。田畑の仕事も一生懸命するし、夫の両親にも良く使えたのですが、たった一つ機織りの仕事だけは、いくら丁寧にやっても姑さんから気に入ってもらえることができません。それなら教えてくれればいいものをちっとも教えてくれませんでした。お嫁さんは、いくら頼んでも教えてくれないものですから、この悲しい気持ちを実家の両親に聞いてもらおうと行きました。しかし、娘の話聞いてはくれるのですが、両親は、「お前のつくしかたが足りないからで、一生懸命に頑張っても機織りもじょうずになりなさい」と言うだけでした。娘は、しかたなく悲しい気持ちのまま、通沢に帰って行くのでした。やはり前と同じで、何度もこんな事を繰り返していました。ある日、とうとう姑から「とてもこの家に置いておくわけにはいかない実家に帰ってくれ」と言われてしまいました。娘は、泣き泣き嫁入りの時に持ってきた機織りの道具を背負いながら梨平に帰ってきたのです。両親は、たいそう悲しみましたが、「もう一度姑さんに謝ってくるように」と家には置いてくれませんでした。娘は、実家の両親からは、通沢へ帰れと言われるし、姑は実家に行くようにと言うし良い考えが浮かびませんでした。そうしているうちに、夕方になり日暮れ近くなってきました。娘は、悲しくなってきた、いっそ死んでしまおうと思いました。娘は、人通りのない暗い山道を通沢の方へと歩き始めました。そのうちに、赤平潟のほとりに出ました。この悲しい気持ちをだれかに聞いてもらいたい、でも、あたりは静まりかえっていて人っ子ひとり見あたりません。ぼんやりとした月明かりだけが潟の水面を静かに照らしているだけです。潟のほとりに一本の楠がありました。娘は、いつのまにか葛の葉をちぎりながらぼんやりしていました。そして、「私が死んだ後に、村人たちが



静まりかえる赤平潟。

この葛の葉を見て、きっと気持ちを汲み取ってくれるだろう。もう、思い残すことはない。」と、ひと思いにざぶんとばかりに渦に飛び込んでしまいました。翌る朝、通りかかった村人が機織り道具を見つけ、大騒ぎになりましたが、今更どうにもなりません。両親もまさか死んでしまうほど思い詰めていたとは知らず、娘の心があわれでなりませんでした。娘は、渦の主になり、そして、渦のほとりにある葛だけは、ほかの葛の葉と違い細かくきざみが入っているのだと言われています。きっと、あわれな娘の気持ちをいつまでも語り伝えようとしているのでしょう。しばらくして、八郎渦の主であった八郎太郎が、お坊さんに姿を変え、ここへやってきました。そして、渦のすぐそばにある山本孫四郎さんの家に一泊し、赤平渦の底深く住み、数ヶ月して帰るときに、また一泊しました。その晩、八郎太郎は、家の人たちに「決して私の寝姿を見てはいけない」と固く言ったのですが、家の人はどうも我慢しきれなくなって見てしまいました。すると、そこには、大きな蛇がいて座敷の奥から土間にまで長くなっていました。その後、八郎太郎は来なくなりました。その家のそばにある大きな松の木の枝が、みんな垂れ下がっているのは、八郎太郎が休むときに松の木に体を巻き付けたからだろうと言われていましたが、平成16年の強風により倒れ、現在は、根部がだけが残っている。



八郎太郎が体を巻き付けたと言われている大松。



## 7 数字で見る時代の移り変わり

### 下北手の人口

	男(人)	女(人)	合計(人)	戸数(戸)
明治4年(1811)	893	822	1,715	279
大正12年(1923)	1,167	1,152	2,319	349
昭和5年(1930)	1,221	1,181	2,403	360
昭和46年(1971)	1,917	2,169	4,086	929
平成25年(2013)	1,643	1,782	3,425	1,214

### 下北手の家畜数

	牛(頭)	馬(頭)	豚(頭)	鶏(羽)
大正14年(1925)	77	97	29	—
昭和3年(1928)	40	12	—	1,735
昭和46年(1971)	125	0	300	23,000

## 米一俵の値段

( J A 新あきた調べ )

明治元年	大正元年	昭和元年	昭和 19 年	昭和 20 年
1 円 69 銭 戊辰戦争	8 円 32 銭	13 円 97 銭	18 円 68 銭	1,204 円 終戦
昭和 48 年	昭和 59 年	平成元年	平成 22 年	平成 24 年
10,301 円 オイルショック	18,668 円 最高値	16,743 円 消費税導入	10,888 円	14,500 円

## 8 『昔使われていた地元言葉』

### 1. 衣服

べゃっこ〔和服〕 ながり〔羽織〕 たながり〔農作業和服〕 てのげ〔手ぬぐい〕  
ひよてのげ〔タオル〕 だち(ずひら)〔もんぺ〕 すねこでだち〔作業用もんぺ〕  
ながてのげ〔女性の頭巾〕※黒木綿に刺し子飾りで、既婚者と未婚者の被り方が違った。

### 2. 食べ物

ぜんめえ〔ぜんまい〕 ばっきゃ〔落のとう〕 でえごん〔大根〕 こざぎ〔雑穀米〕  
あんびもち〔大福餅〕 はんごろし〔おはぎ〕 かやぎ〔鍋(貝焼)〕 おじげ〔味噌汁〕  
がっこ〔漬け物〕 しょ〔塩〕 おはづ〔おひつ〕 はんでえ〔茶ぶ台〕

### 3. 住まい

でどご〔居間〕 おじょめ〔居間〕 あがりぐち〔上がり框〕 おえ〔前座敷〕  
ゆるぎ〔囲炉裏〕 ほど〔火床〕 ねどご〔寝室〕 めんじゃ〔流し〕 へんち〔便所〕  
しょべちま〔小便所〕 ひやし〔庇〕 おにわ〔屋外〕

### 4. 家族

じっちゃ〔祖父〕 ばっちゃ〔祖母〕 おど〔父・夫〕 あば〔母・妻〕 あんちゃ〔兄〕  
おんちゃ〔弟〕 あねえ〔姉〕 あねちゃ〔娘〕

### 5. 身体

なじぎ〔額〕 このげ〔眉〕 まなく〔目〕 おどぎゃ〔顎〕 おどえび〔親指〕  
あばえび〔人差指〕 あばら〔脇腹〕 よろた〔大腿〕 こぶら〔膝〕 しね〔下肢〕  
あぐど〔かかと〕 こうべ〔頭〕

### 6. 地名

さぶが〔寒川〕 とんざ〔通沢〕 たがらが〔宝川〕 くろが〔黒川〕 なしびら〔梨平〕  
めえだ〔前田〕 おえだら〔太平〕 やねほど〔谷内佐渡〕

### 7. その他

きやど〔道〕 なて〔道〕 くろ〔畦〕 なしろ〔苗代〕 しょとめ〔早乙女:そうとめ〕  
けがち〔凶作〕 ほえど〔卑しい:食いしんぼ〕 おがわ〔おまる〕 はぎ〔床上用箒〕  
わらばき〔土間用藁箒〕 こわばき〔作業用藁木箒〕 ほじなし〔正気でない〕  
さかしい〔賢い〕 おどげでねえ〔容易でない〕

(調査・井川博之)

# 下北手・歴史の散歩道マップ



凡例	
史跡	1 ~ 8
神社	9 ~ 26
保存樹	27 ~ 40
記念碑	41 ~ 49
庚申塚	50 ~ 79

大巻

県営住宅

下北手松崎

家ノ前

大学寮前

下北手桜

桜台

桜ガ丘

下北手梨平

下北手黒川

下北手通沢

下北手宝川

下北手寒川

下北手柳館

堂ヶ下

バス折返し点

細谷沢

種ヶ崎

大西ヶ沢

前田

宝川

奥通沢

宝川上丁

宝川下丁

寒川

宮沢

五関

井関

川原

前谷地

千秋の丘1区

千秋の丘2区

下北手中

下北手小

秋田ワークセンター

地域センター

ワークセンター前

柳館

寒川入口

下前田

上前田

種ヶ崎

宝川中丁

宝川下丁

宝川上丁

桜の園

梨平

黒川

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

## 写真提供者(50音順・敬称略)

飯塚四朗、石塚 威、大槻安廣、小田島久夫、川村忠克、川村俊春、  
嵯峨博文、佐々木和子、佐々木紀男、柴田春雄、進藤新太郎、進藤清子、  
松崎町内会、千秋の丘高齢者部会、下北手小学校

## 編集委員の調査・編集会議風景



### 編集後記

一昨年作成した“歴史の散歩道”の第二弾として昨年の8月頃から取りかかりました。編集会議は15回も開き、収集にあたっては処分される寸前の物もあったりで、大変でしたが、個人的には、まずまずのものが完成したと思います。

最後に、作成にあたりご協力いただいた方々に感謝申し上げます。(加藤)

### 『下北手・歴史文化探訪』

発行責任者 下北手地区振興会

会長 田口 善一

発行年月日 平成25年9月13日

編集委員長 加藤 忠弘

編集委員 佐々木紀男

” 川村 俊春

” 田中 春生

” 石塚 威

” 佐々木 登

” 飯塚 四朗

” 井川 博之

助言者 木村 裕

印刷所 秋田ワークセンター





松崎前谷地方面から太平山を望む

## 下北手村民歌

- 一 日本海にそそぎ入る  
太平川を境して  
河辺郡の北のすみ  
これぞ我が村下北手
- 二 部落の数は八つありて  
黒川 寒川 宝川  
松崎 桜に 柳館  
梨平それに 通沢
- 三 祖先が我らにたまわりし  
里には美田がとみをなし  
山には松杉しげりたり  
薪炭木材ゆたかなり